

熊本学園大学 外国語学部 第17号

英米学科 GAZETTE

令和2年2月
発行・編集
熊本学園大学 外国語学部

巻頭言

人名のローマ字表記

～ Shinzo Abe から Abe Shinzo へ～

神本 忠光（教授・外国語学部長 / 英語教育学）

名前を書くとき、日本をはじめ中国・韓国などでは「姓→名」の順に書く。ローマ字で書くとき日本は「名→姓」と逆にするが、中国・韓国は元の順序のまま書く。文科省は今年1月1日から公文書では日本語本来の順序で表記することにした。明治の欧化主義の名残に決別し、民

間にそして世界にも広めたいはずである。だが、浸透速度は牛の歩みであろう。2002年度版から中学校の英語教科書は「姓→名」になっている事も知られていない。

一石二鳥の名案がある。姓のみを大文字にする表記法を、いっそのこと東京五輪で採用してはどうか。各言語の伝統を重んじつつ、世界中の誰もが容易に姓名を区別できる。電光掲示板の選手名を見て、日本人はベトナムやハンガリーにもきっと親しみを覚えることになる。これは世界への令和のおもてなしになりうる。

ゼミ紹介

秋学期授業での一コマ

向井 久美子（教授 / アメリカ文学）

「アメリカ小説と映画」について学ぶゼミで、春学期は小説について、秋学期は映画について学びます。映画に関しては、スクリーニング、分析、解釈あたりまでは、受動的になりがちなので、アクティブラーニングとまではいかないまでも、能動的に学ぶよう、それぞれ推薦したい作品を選んで、面白さを分析したり疑問点を解決しながら、パワーポイントでその魅力を紹介するというプレゼンを行います。この一連の自主的な学びで得られた知識や経験が、社会に出ても、何らかの形で役立つのではと思います。

プレゼンに際して、学生はだいたい有名な映画を選択するので、さまざまな分析や解釈、スピンオフやトリビア情報などをアドバイスしつつ、事前にファイルのやり取りをして添削し、皆が興味を持てるような資料に仕上げていきます。ただ、中には非常にマニアックな映画を選んでくる学生もいて、恋愛ゾンビコメ

ディー『ウォーム・ボディーズ』などもその一例です。単なるB級映画なのかと思いきや、アイザック・マリオンの小説が原作、ハリウッドの大御所ジョン・マルコビッチが出演、シェークスピアの『ロミオとジュリエット』が土台の、進撃の何とか風ゾンビ悲喜劇で、意外な発見ができたりします。本当によくできたプレゼンに出くわすと、クラス全員で今すぐに見たい！という衝動がわき、その空気が教室全体に伝わって不思議な心地よさを体感できるのも、この形式の授業の妙味なのかもしれません。

さて今年のゼミは、さまざまな個性の集まりで、統一の関心や趣向を見つけにくく、そういう意味では4月から手探りで教えていたわけですが、それは選択された映画にも如実に反映されていました。家族、戦争、教育、LGBT、恋愛、復讐、クライムサスペンス、サイコスリラー、オカルトなど、見事にバラバラなテーマの作品で発表され、刺激的で楽しい議論が行われました。



向井ゼミ



授業風景

書籍紹介

ゲーテ『ウルファウスト』

八木 昭臣（准教授 / ドイツ文学）

『ファウスト』の初稿です。ゲーテの没後 50 年ほどたって写本が発見され、1887 年に刊行されました。

『ウルファウスト』執筆の時期は 1773～75 年頃で、『若きウェルテルの悩み』と重なっています。内容は「ファウスト伝説」に「グレートヒェン悲劇」を結びつける構成ですが、グレートヒェンの物語が大半を占めています。

『ウルファウスト』と『ウェルテル』は表裏の関係にあります。グレートヒェンがロッテのもう一つの運命を暗示しているように思わせるからです。『ウェルテル』は短期間で完成し、当時 25 歳のゲーテはヨーロッパの他の国々でも有名な作家となります。一方『ウルファウスト』は、「彼女は裁かれた」というメフィ

ストの台詞で中断されたまま長い間放置されてしまいます。

ほぼ 10 年が過ぎた 1786 年、『ウェルテル』の大幅な改訂が終了します。このころからゲーテは『ファウスト』に再び向き合おうとしています。しかし、この作品が『第 1 部』として刊行されるのはさらに年月を経て 60 歳を目前にした 1808 年のことでした。

『第 1 部』では、「裁かれた」というメフィストの台詞のあとに、「救われた」という天上からの言葉が挿入されました。『ファウスト』の完成は『第 2 部』にゆだねられることとなります。『第 2 部』の完成は 82 歳の死の前年のことでした。

『第 2 部』の終わりでは、「かつてグレートヒェンと呼ばれた女」が死後のファウストを天上へと導きます。

なお、『ウルファウスト』は潮出版社版ゲーテ全集で読むことができます。

英米学科 NEWS

第 18 回スピーチ大会

デイビッド・オストマン

（講師 / 異文化理解・異文化コミュニケーション）

令和元年 11 月 27 日（水）英米学科の第 18 回のスピーチ大会が開催されました。スピーチ大会と聞くと、昔の古い時代と想像する方も少なくないのではないのでしょうか。しかし、緊張しながら人前に立ち、明るく自信をもってスピーチを行うことは決して簡単なことではありません。英語の授業ではプレゼンを行う機会がありますが、スピーチ大会は一味が違います。通常のクラスではプレゼンの評価は内容中心ですが、スピーチ大会の場合は英語の発音やイントネーションやジェスチャーを巧みに駆使して聴衆と審査員を感動させなければ、勝ち目はないのです。この感動させる力は人を説得する能力と自分をアピールする才能につながり、就職活動の成功や社会生活における健全な人間関係を築くことにとても役に立ちます。自分の伝えたい「内容」がどんなに素晴らしいものだとしても、それをうまく人に伝えなければ、望んでいる結果には至りません。スピーチ大会を積極的に準備し、行うことで、この感動させる力が身に付きます。時代は変わりつつありますが、スピーチ大会の意義と大切さは

今も変わりません。

今回のスピーチ大会はスピーチとレシテーション（暗唱）の 2 つの部門に分かれ、参加者は 8 名でした。審査員として佐藤勇治教授と米岡ジュリ教授に務めていただき、審査業務に加え全参加者に励ましの言葉と細かいアドバイスを提供されていました。ベスト・スピーチ賞は藤原舞奈さんが受賞し、ベスト・レシテーション賞の受賞者は富永蓮花さんでした。今回のスピーチ大会に参加できなかった学生は是非、来年に！



編集人 塩入 すみ（英米学科長）

〒862-8680 熊本市中央区大江 2-5-1

TEL: 096-364-5161（代表） Mail: shioiri@kumagaku.ac.jp